

創刊の辞

『イスラーム世界研究』創刊号をお届けいたします。英語名は *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* です。2つを合わせて見ていただくと、この新しい学術誌の位置がおわかりいただけます。キーワードは、京都、イスラーム地域研究、イスラーム世界です。

2006年に開始された「NIHUプログラムイスラーム地域研究」の一環として、京都大学に「京都大学イスラーム地域研究センター」（正式には、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター）が設立されました。このプログラムには5つの拠点が参加しており、京都大学のセンターは「京大拠点」と通称されています。本誌は、そのセンターが刊行するイスラーム地域研究のための学術誌であり、京大拠点の研究課題である「イスラーム世界における国際組織」をはじめとして、関連する諸分野の研究成果を発信することを目的としています。

「NIHUプログラムイスラーム地域研究」は、2006年に「人間文化研究機構（NIHU）」の中に設立された「地域研究推進センター」が推進する地域研究の「拠点形成」のためのプログラムで、特定重点地域として「イスラーム地域研究」を対象としています。京大拠点のほかに、早稲田大学イスラーム地域研究所（中心拠点）、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文文学開発センター、上智大学アジア文化研究所、東洋文庫の合計5つの拠点がネットワークを形成しています。

「イスラーム地域研究」は、「各地域の個性とイスラームとの係わりを検証し、多様なディシプリン研究を活用することによって現代イスラームの理解をさらに深めること」をめざすもので、その名の通り、1997～2002年に実施された「イスラーム地域研究」（正式名称「現代イスラーム世界の動態的研究——イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」）を継承・発展させるものです。実際、佐藤次高代表を初めとして、前回の研究プロジェクトの中心メンバーが幾人も参加して、「継承」の要となっています。もちろん、新たに加わる研究者や若手も多く参加して、総員で「発展」を担っていくことは言うまでもありません。

かつての「イスラーム地域研究」を仮に「第1ステージ」として、今回の「イスラーム地域研究」を「第2ステージ」と呼ぶならば、新しいステージの特徴は「拠点形成」という点にあります。第1ステージは、文部省（当時）の「新プログラム方式」による助成を受けた研究プロジェクトでしたが、第2ステージはより恒久的な地域研究の拠点形成をめざし、日本における研究体制を決定的に強化していこうとするものです。

地域研究の社会的役割と地位は20世紀後半において次第に大きなものとなり、特に近年のグローバル化の流れの中で、その重要性について社会的認知も高まってきました。日本の中の動きを振り返ってみれば、1985年の日本中東学会設立を初めとして地域研究の学会が格段に増加・発展したこと、1994年に国立民族学博物館に地域研究企画交流センターが設立されたこと、1998年に京都大学に初めて「地域研究」の博士号を授与する研究科が開設されたこと、2004年に地域研究学会連絡協議会、地域研究コンソーシアムが設立されたこと、2005年に始まった第20期・日本学術会議の専門委員会の1つとして初めて「地域研究委員会」が設立されたことなども、その現れです。とはいえ、イスラーム地域研究、中東地域研究などに限って言えば、研究体制の全国的な制度化は、1970年代以来ずっとその必要性が指摘されながらも、十分な形を取れずにきました。地域研究の発展と同時に、制度化の面でのこれまでの不十分さを考えると、今回のイスラーム地域研究の拠点形成事業が持つ重要性が明確となってきます。

拠点を形成するにあたって、特定の大型の組織を立ち上げるのではなく、ネットワーク型の共同研究の推進体制を構築していくことは、いろいろな意味で、きわめて今日的な道であり、5つの拠点が協力、協働しながら、恒常的な研究ネットワークを作り上げていくことがこれからの課題です。ネットワーク型の拠点形成を、佐藤次高代表は「船団」になぞらえました。5つの船が船団をなして雄大な大洋を航行する比喩は、非常に明晰なイメージを喚起します。それぞれの船が独自の課題と乗組員を持ちつつ、全体としては船団を構成して、共通の目的地へ向かって進むのです。あるいは、逆に、連携して共通の目的をめざす中で、それぞれの船が独自色をもって船団全体に対して貢献する姿を思い浮かべることができます。

京大拠点という船は、その活動の1つとして本誌を創刊しました。デジタル化、インターネット化の時代において「プリント・メディア」をどのように活用すべきかは、多少意見の分かれるところかもしれません。本誌はデジタル化されて、インターネット上でも配布されますが、同時に、本誌の立場として、紙に印刷された学術誌は今なお必要であると考えています。紙に印刷されてインパクトを持つ表現形式があるから考えるからです。

そのことは、本誌が収録する「研究成果」の様態が多様であることにも結びついています。京大拠点では、ネットワーク型共同研究全体の目的を推進すると共に、特に強調したい課題として、(1)先端的な研究の推進、(2)「知のインフラ」構築への貢献、(3)若手研究者の育成、を掲げています。本誌が(1)(3)の成果を収録することは言うまでもありませんが、特に(2)の課題にも積極的に取り組む所存です。

「知のインフラ」構築とは、地域研究やイスラーム研究の基礎研究・実証研究の基盤を形成するような研究作業のことを指しています。具体的に言えば、たとえば非常に重要な原典の翻訳・注解というものは、日本語で広く読者に地域を理解する生の情報を提供する上で、一般読者にとっても他の研究者にとっても非常に有益なものです。しかし、従来研究成果に対する評価方式では、いわゆる論文に比べて原典翻訳は低い評価しか与えられないのが通例です。もちろん、「論文」という最終的な加工品が、高度な質をもって学術的な貢献をなすことは重要ですが、より広範囲の貢献という点から見ると、「原典翻訳」という、いわば加工済み原料の提供は、研究の基盤を形成する大きな役割を担うことがわかります。「知のインフラ」構築とは、そのような種類の研究発信を高く評価し、奨励するものです。

そのため、本誌では、「論文」「研究ノート」「書評」などのほかに、耳慣れないであろういくつかの「範疇」を作りました。本来の論文を含めて、全体として、大きく「論考」「知のインフラ整備への貢献」「書評及び研究動向」「フィールド報告」の4つに区分しました。論考に属するのは「論文」、研究史や資料を広範に考究する「サーヴェイ論文」、独創的・萌芽的な研究を中間的に報告する「研究創案ノート」、臨地研究(フィールドワーク)に基づく論考である「臨地サーヴェイ」です。知のインフラ整備への貢献とされるのは、重要な原典資料を翻訳し解題や注を付す「原典翻訳」(対訳を含む)、特定の研究テーマについて年表という形式を通じてその全体像を描こうとする「主題年表」、研究対象が組織、運動などである場合に、悉皆調査などをおこなって作成する「ディレクトリー」、特定の研究テーマについて網羅的な文献リストを作成したり、基礎的な文献や重要な文献を取り上げて解題を付す「ビブリオグラフィー」です。書評及び研究動向に含まれるのは、1冊～数冊の重要な文献を取り上げて、それを書評するという形式を取りながら特定の研究テーマあるいは学術分野について考察する「書評論文」、学会の動きや研究の動向を報告する「研究動向」、原典や研究書の「書評」(特に、深みのある学術情報を広く提供するという観点から、優れた新刊書の書評が歓迎さ

れます)です。そして最後にフィールド報告には、臨地研究・フィールドワークの速報である「フィールド報告」が入ります。

このような諸形態を通して、上記の(1)～(3)の成果を収録し、発信していきたいと願っています。言うまでもなく、京大拠点の発行ということは単にこの拠点の成果を収めるものではなく、ネットワーク全体への参画の一部として、イスラーム地域研究に参加するすべてのメンバーに門戸が開かれています。そのみならず、イスラーム地域研究に関わりのある諸分野の研究すべてに、そして、地域研究の発展に寄与しうるすべての隣接領域や他の諸地域の研究に、門戸を開いていきたいと思えます。

どうぞ、この新しい学術誌の船出を祝福し、ご支援、ご鞭撻をいただきますよう、お願い申し上げます。

京都大学イスラーム地域研究センター長
小杉 泰